史跡天皇の杜古墳

（第２次）発掘調査現地説明会資料

平成元年11月12日

（財）京都市埋蔵文化財研究所

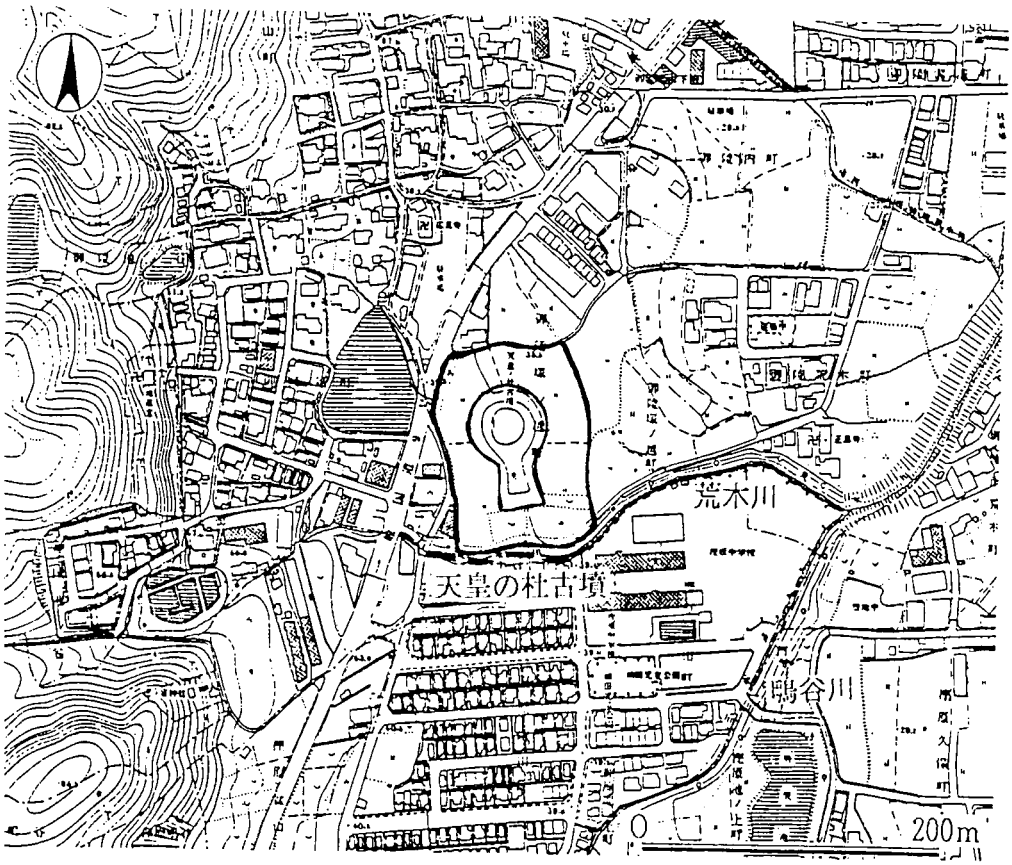
1　調 査 地　西京区御陵塚ノ越町

2　調査期間　平成元年９月25日～現在継続中

3　調査面積　75㎡（11月初旬現在）

4　調査目的　史跡整備工事に伴う墳丘状態の解明

5　調査主体　（財）京都市埋蔵文化財研究所



天皇の杜古墳の位置（１：5,000）

1　調査の経緯

天皇の杜古墳は、京都市内で最も保存状態の良い前方後円墳です。それはこの古墳が、江戸時代から文徳天皇の御陵として地元で保存されてきたためです。そして、大正11年には国の史跡に指定され、さらに昭和56・57年には周囲の水田も京都市によって買い上げされました。この貴重な文化財である天皇の杜古墳を、京都市では保存・公園に整備して、活用をはかる計画を進めています。その際には具体的な資料が必要ですので、発掘調査を行って古墳の状態を調べることとなりました。

すでに、昭和63年12月から平成元年３月にかけて、周濠の存在が想定された周囲の水田部分を対象に第１次調査を実施しました。しかし、周囲の水田下にはすべて自然の堆積層がみられ、周濠と呼べるものは存在しないことが明らかとなりました。また、この調査の際、石碑の立つ後円部の西側で、葺石と埴輪が良好に残っていることを確認しました。今回は、この葺石と埴輪が本当に墳丘の全体に及んでいるのか、その状態はどうなのか、といったことを明らかにする目的で調査を行なっています。

2　各トレンチの状態

今回は、前回のトレンチを上方に延長する形で設定しました。各トレンチの幅は２ｍが基本です。

調査した各トレンチでは、墳丘の上段斜面に施された葺石、上段と下段の境をめぐるテラス、ここに樹立された埴輪列、下段斜面に施された葺石、その外側の状態、等を確認しました。それらを、以下の表にまとめました。

施設／トレンチ	上段		埴輪	ﾃﾗｽ	下段		その外側
	葺石	根石			葺石	根石	
後円部北トレンチ	○	◎	○	○	○	◎	平坦面で石なし。
後円部東トレンチ	○	◎	◎	○	◎	○	斜面で葺石あり。
前方部東トレンチ	◎	◎	◎	○	○	◎	ほぼ平坦で石なし。
前方部南トレンチ	◎	◎	◎	○	○	×	撹乱あり、不明。
前方部西トレンチ	○	◎	◎	○	○	×	削平され、不明。
くびれ東トレンチ	○	◎	◎	－	－	－	

表の凡例　○検出したもの　◎良好に遺存のもの　×未検出のもの

3　調査の概要

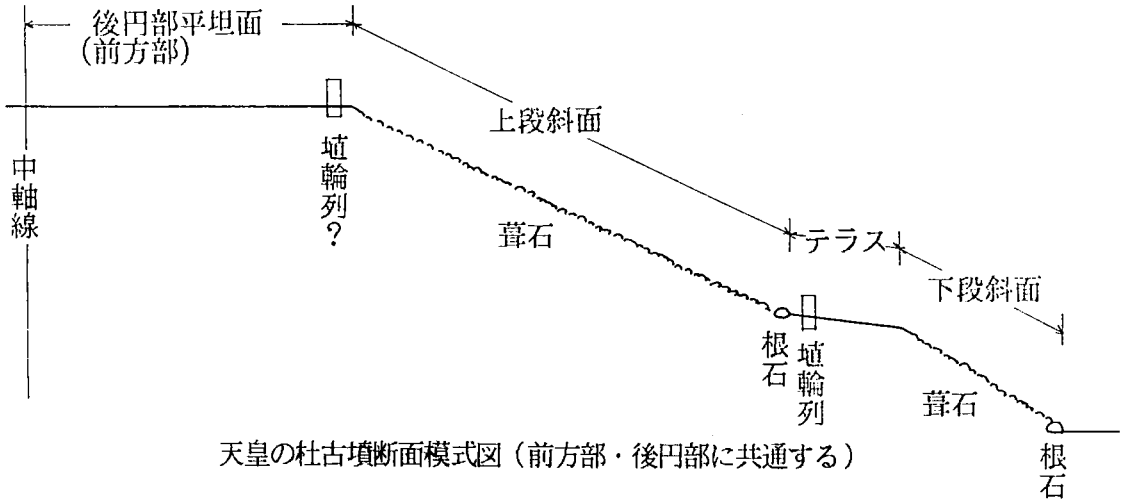
①　**上段斜面の葺石**　墳丘の上段斜面に葺石が施されることは、後円部西側に露出する箇所があることで推定できます。今回の調査では、各トレンチとも良好な状態で葺石を検出しています。墳丘上段の裾を示す根石は、大き目の石が横に並べられています。

②　**埴輪列**　埴輪は、テラスの内側に樹立されています。間隔は、中心間で約60cmです。テラスに沿って全周しますので、この部分だけでも 520本以上の埴輪が立てられていた計算になります。検出した埴輪は、基底部とその上のタガまで完全に残っており、上部の破片は円筒の中に落ち込んだり周囲に散乱したりしていました。

③　**テラス**　上段斜面と下段斜面の間にはテラスが全周します。テラスは幅が約２ｍあり、少し傾斜をもっています。この部分は古墳を造る際の段築の跡です。ここには葺石は施されていませんでした。

④　**下段斜面の葺石**　下段斜面にも葺石が施されています。特に、後円部の東側トレンチでは、大きな石を用いて丁寧に葺いています。その他のトレンチでは石の抜け落ちた部分も多く、裾にはたくさんの石が転落していました。下段裾の根石は、後円部北・前方部東のトレンチで確認できました。大き目の石を横に据えていますが、上段裾の根石より小型です。

⑤　**墳丘の外部**　各トレンチで異なった状況が見られました。後円部北・前方部東のトレンチでは、下段斜面の根石の外は平坦で、ここには石は葺かれていませんでした。これに対し、後円部東のトレンチでは下段斜面に葺石が続き、どこが墳丘の裾なのか明確でありません。また、前方部の南と西のトレンチでは、耕作のために裾が削られ、根石は残っていませんでした。



天皇の杜古墳断面模式図（前方部・後円部に共通する）

4　まとめ

① **墳丘の状態**　保存状態は極めて良好です。調査によって、現状で判断できるテラス・墳丘裾が当初の位置に一致することが分かりました。また、西側では水田耕作によって裾部が失われていましたが、北・東側では墳丘の崩れた土に覆われて当時の姿をそのまま残すことも分かりました。これは地形の関係で北東側に封土が流れやすかったためと思われます。

② **墳丘の規模**　この古墳は「二段築成」によって造られた前方後円墳です。

古墳の全長は、下段裾で推定82m、上段裾で71mあります。

後円部の直径は、下段裾で50m、上段裾で40m。高さは西側で6.7 m、東側で8.8 mあります。墳頂の平坦面は直径17m前後とみられます。

前方部は、下段の幅が推定で33m、上段幅が20mあります。高さは西側で3.6 m、東側で6.0 mあり、頂の平坦面は長さが約30m、先端の幅は 9mです。

③ **築造の時期**　この古墳の墳形は、後円部に比べ前方部が小さい、いわゆる「柄鏡式」の墳形を有しています。これは古墳時代前期の前方後円墳にみられる特色です。類似するものとして、奈良県日葉酢媛命陵古墳（全長 207m）、兵庫県明石市五色塚古墳（全長 194m）、大阪府和泉市黄金塚古墳（全長85m）などがあります。いずれも前期後半に属する有名な前方後円墳です。

④ **古墳の築造企画について**　葺石の根石をもとに規模を計測すると、後円部下段の直径は50m、上段の直径は40m、上段での全長は71m、前方部の上段幅は20mとなります。これらは5mないし10mの倍数とみられます。この古墳は極めて正確に造られていますので、築造に際しては基準となる尺（ものさし）が存在したはずです。これらの数値は、築造企画を考える具体的な値として重要となるでしょう。

⑤ **首長墓の中での位置付け**　この天皇の杜古墳の位置する樫原・御陵・山田の一帯には、前期から後期に至る前方後円墳が多数築かれており、まとめて「樫原グループ」と呼ばれてきました。これらは、この地域を支配した首長の墓と考えられるものです。天皇の杜古墳は前期の後半に位置づけられますので、樫原の丘陵上に築かれた前期古墳に続いて造られた古墳とみられます。

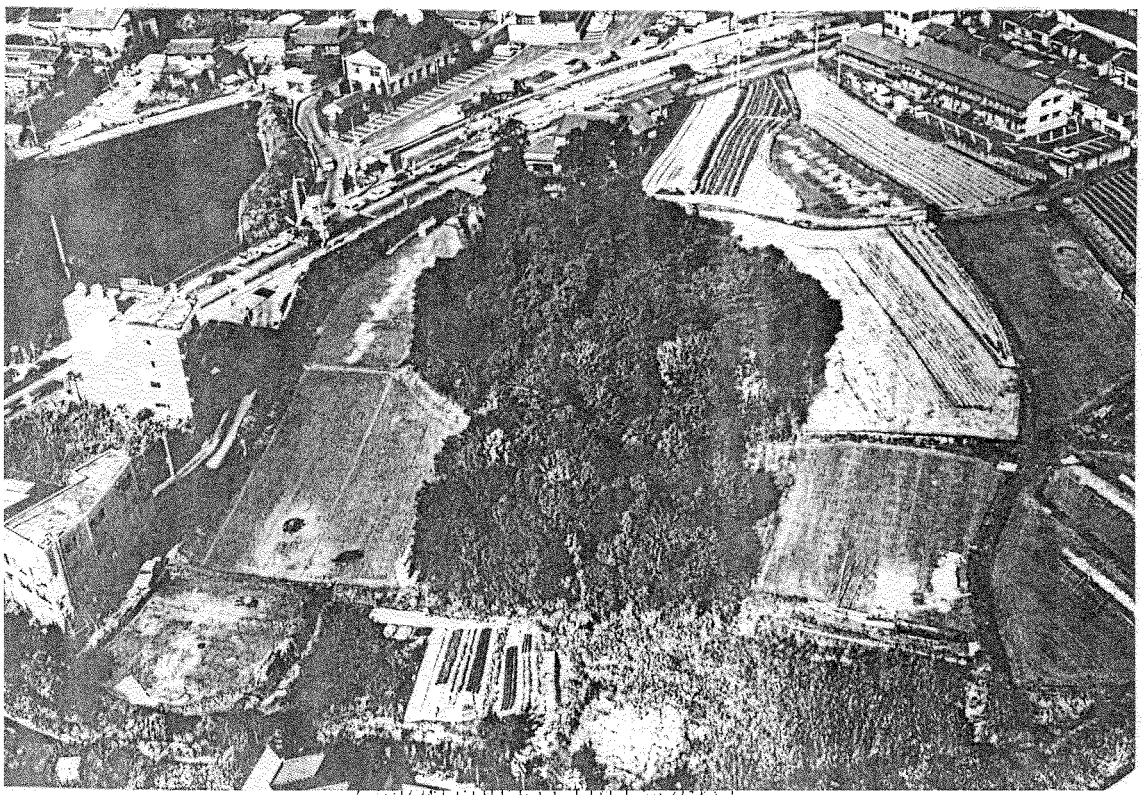
しかし、この古墳が築かれて以降、中期に入ると主要古墳は山田の地に連続して築かれることになります。古墳がこのように連綿と築かれるので、この地域の勢力は常に安定していたようにも思われますが、内部では色々な勢力の浮き沈みがあったようです。

このように、古墳の動向を調べることによって昔の地域史を復原することができます。山城地方の古墳時代は、記したものが少ないだけに、首長墓の動向は特に重要です。

5　おわりに

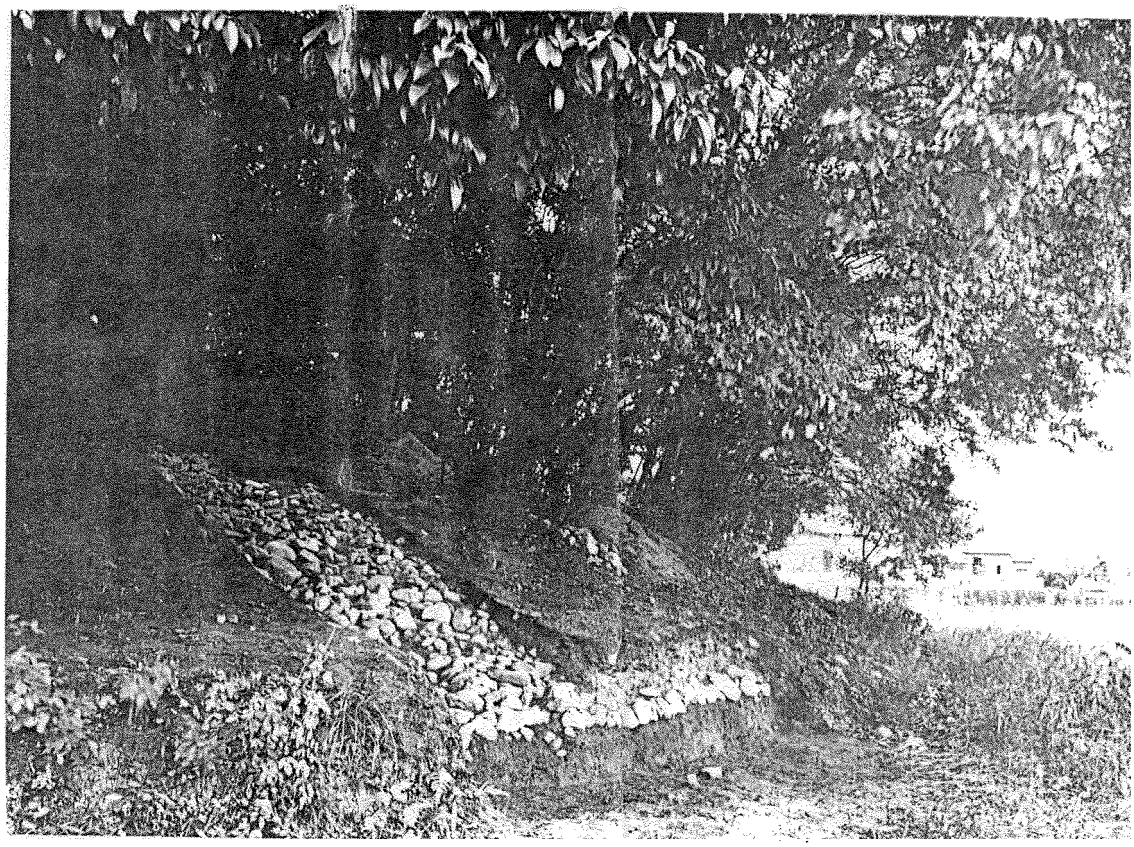
天皇の杜古墳は京都市を代表する前方後円墳です。また、その秀麗な墳形は山城地方を代表するものでもあります。そしてまた、調査によって墳丘は非常に残りが良いことも判明しました。

京都市内では約20基の前方後円墳が知られていますが、現存するのはごくわずかです。また、樫原・山田の一体には、昭和の初めまでは穀塚古墳、車塚古墳、清水塚古墳などの古墳が残っていましたが、今はすべて壊されてしましました。幸いこの古墳は公有化が完了し、史跡公園として永く保存されてゆくでしょうが、地元の人達の努力によって今日まで保存されてきた点を踏まえて、地域の中に溶け込んだ史跡公園として活用されることを願うものです。

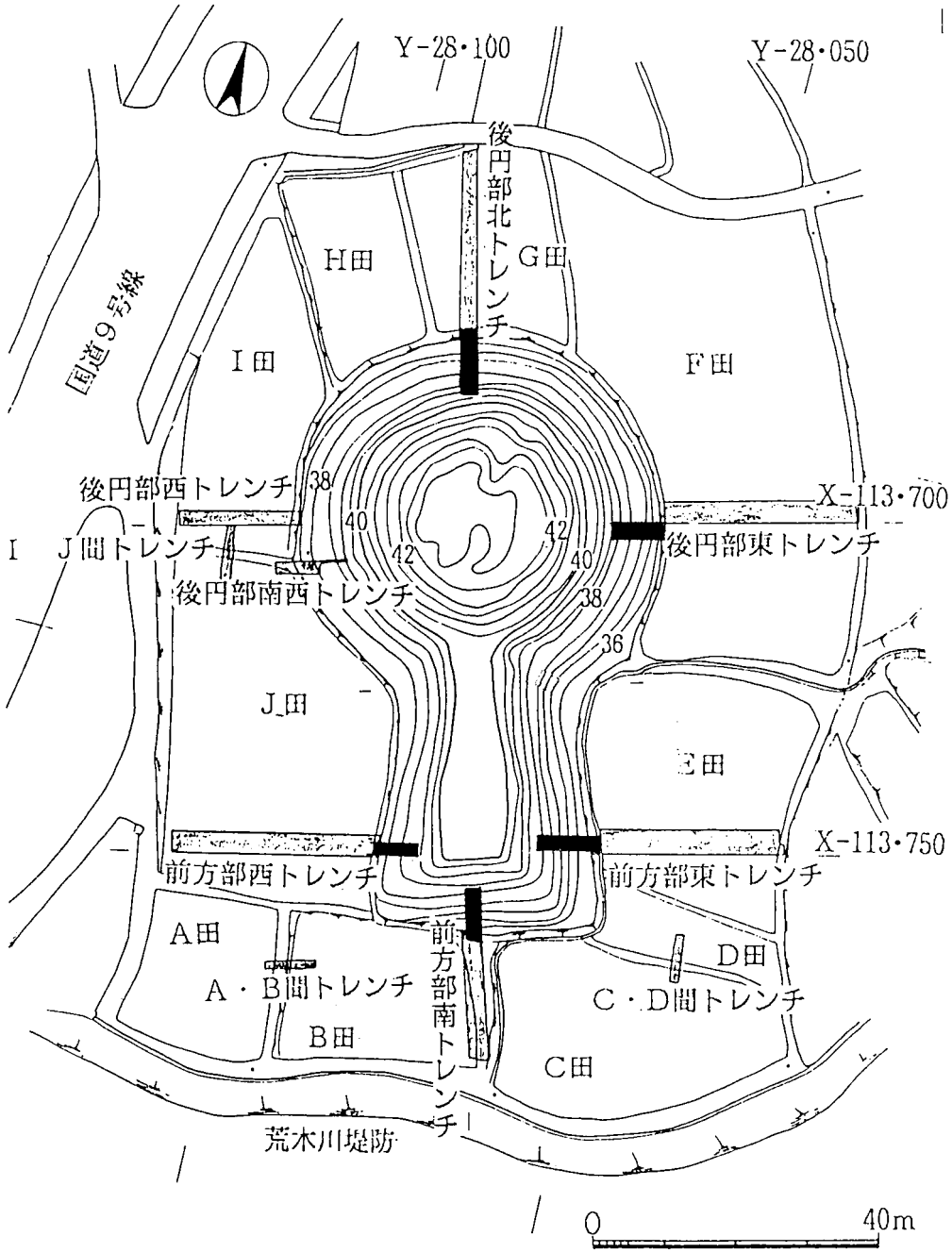


天皇の杜古墳墳丘（南上空から）

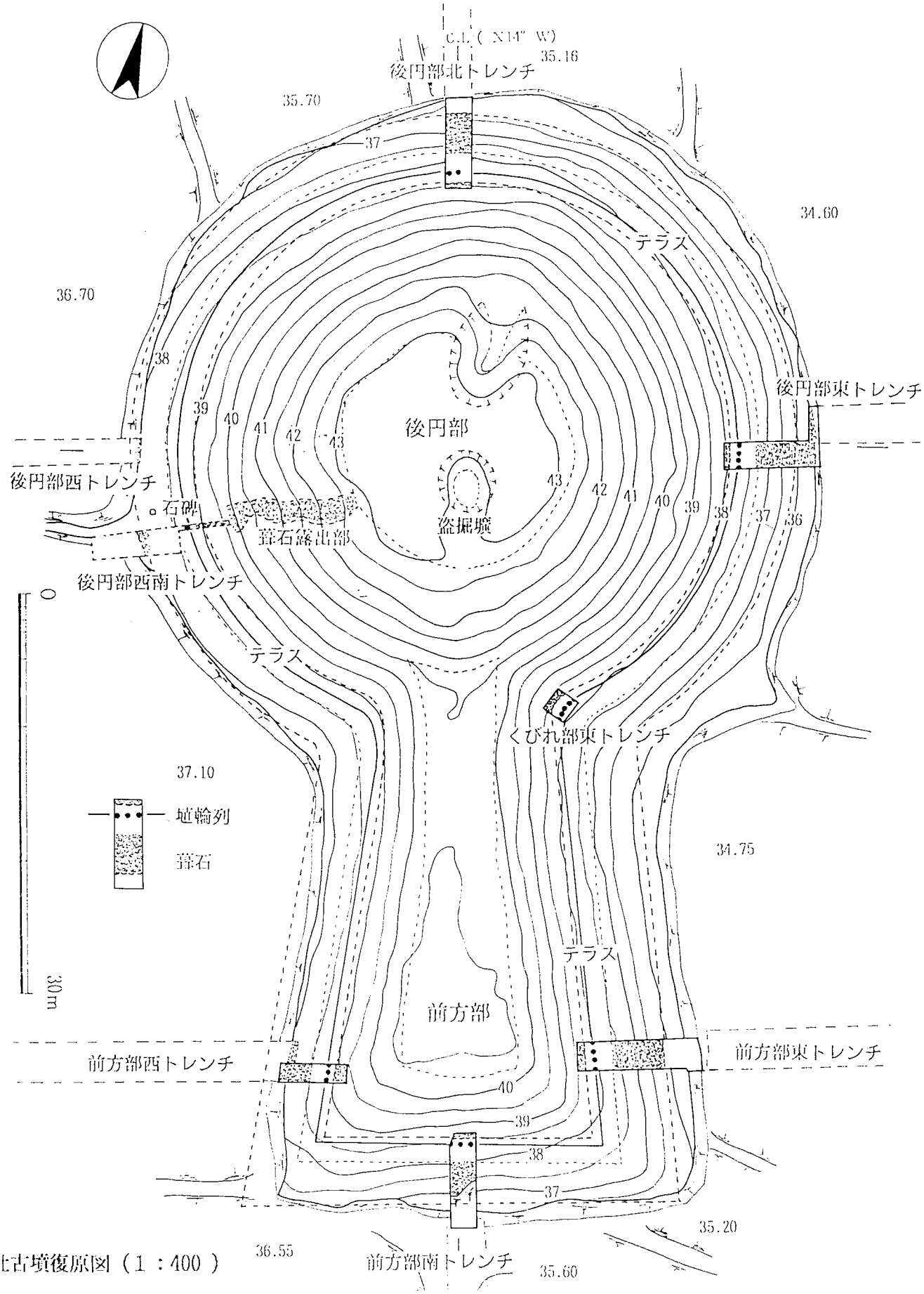
上段の葺石と埴輪（前方部南トレンチを南東から）



下段斜面の葺石（後円部東トレンチを南東から）



調査区配置図（1 ：1.000 、 ■ が今回の調査区）



天皇の杜古墳復原図（1：400）

天皇の杜古墳に関係する資料

天皇の杜古墳　⑱西京区御陵塚ノ越町

国道九号線のすぐ南側の水田中にある。西方の山地が東へのびる山裾にあたり、古墳のある地点は、東や南にひろがる水田面よりも一段高い。中世には文徳天皇陵と考えられていた。

古墳は全長八六メートル、後円部径五三メートル、同高さ八・五メートル、前方部の幅三五メートルの規模をもつ前方後円墳で、周囲には幅三〇―三〇メートルの堀をめぐらしている。墳丘は二段築成で、葺石、埴輪を伴う。内部主体については未調査だが、粘土槨の可能性がつよい。墳丘の形状は、いわゆる柄鏡型で、その築造年代も五世紀前半までさかのぼるものと思われる。大正一一年（一九二二）に史跡指定されており、墳丘の保存状態も良好である。京都盆地に残る古墳の中では、築造時の墳形をとどめる数少ない例の一つである。

③（『京都市の地名』西京区）

文徳天皇陵　下ル田の南　後村あり

②（『都名所図絵』巻之四）

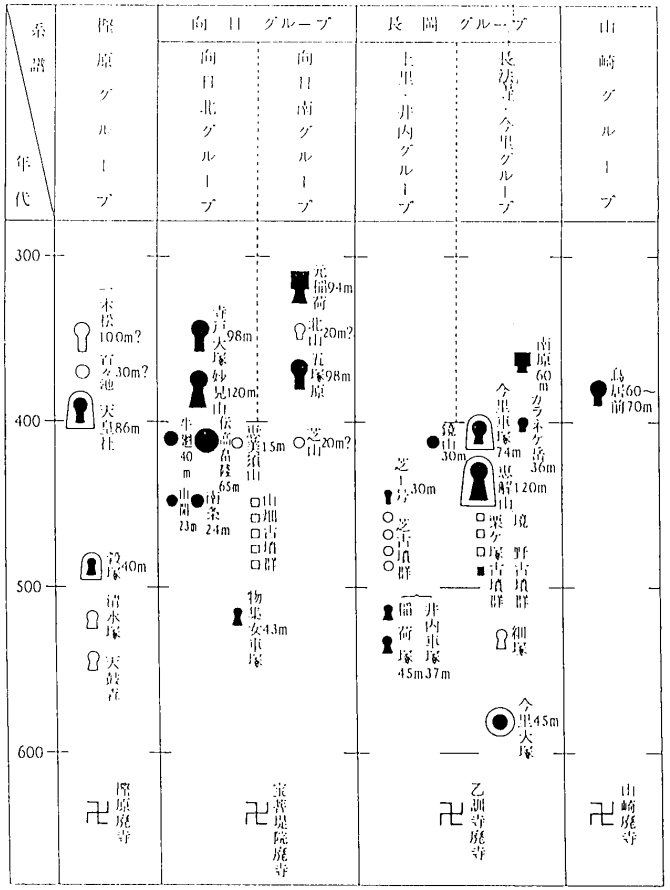
○文徳天皇陵　在二同所民家一卯辰間三町許一延喜式曰。平安宮御宇　文徳天皇陵。在二山城國葛野郡一。兆域東西四町。守戸五烟　巻二十一　陵南車塚有是則御葬送御車ヲ納ル所也。有二陵上小祠一。額　桓武天皇是則土人所レ誤也　○文徳天皇　仁明帝御子。人皇五十五代ノ御門ナリ　三代實録曰。天安二年八月乙卯帝崩二新成殿一。中略　庚申大納言安倍朝臣安仁率二陰陽權助滋岳朝臣川人。助笠朝臣名高等一。至二山城國葛野郡田邑郷。直原岳一。點二定山陵一。〇甲子夜葬　太上皇帝於田邑山陵一。殯葬之禮如二仁明天皇故事一。巻十山三十六丁

①（『山州名跡志』巻之九）

④　文徳天皇陵　右京区太秦三尾町

門徳池の東に所在、田邑陵という。文徳天皇は仁明天皇の第１皇子で母は藤原順子（冬嗣女）。嘉祥３年（850 ）即位、天安２年（858 ）８月27日死去（文徳実録）。「三代実録」によると、同 9年 2日「至 二山城国田邑郷真原岡一 、定二 山陵之地」、同６日「葬二文徳天皇於真原山陵」とあり「田邑郷真原岡」の地が当地である。葬儀については、翌７日の条に、１０人の僧を「近陵ノ山寺」に、４０人の僧を広隆寺に配置し、４９日間経を読み、念仏せしめ、同年１２月１０日、詔勅により真原山陵を田邑山陵と改名したと記される。円墳で参道が門徳池の中央を通っている。　（『京都市の地名』右京区 ）

⑤「御陵の天皇の杜古墳は一町四畝六歩を有する前方後円で南面し、前後の長さ八十五米、後円基底五十一米、東側の高さ東面で八米、前方部はこれより約三米低く、正面の幅三十二米で実に整然たるものである。後円の頂に文徳天皇を奉祀する小祠あり、この墳は田邑陵だと傳へている。祠をめぐり九本の檜、杉の老木茂遠くより望むことが出来る。大正十一年史蹟に指定された。道路をへだてて用水池の南に小さい円墳があつたといふことっであるがこの墳の陪塚であつたかも知れない。」　（『松尾乃郷』Ｐ29 ）



⑥　桂川右岸地域の首長墓　（『向日市史』上巻）

「これに対して天皇ノ杜古墳は、全長８６ｍの前方後円墳で、周濠を有し、恵解山古墳と同様に低地へ築造した堂々たる首長墓である。」　（『京都の歴史』１　P75 ）

「天皇ノ杜古墳は埋葬施設や副葬品は不明だが、墳丘の平面企画は神戸市五色塚古墳と酷似し、ちょうどその２分の１の規模をもつことから、五色塚古墳とほぼ同じ紀元400 年直前の年代を与える。」　（『向日市史』上巻　P152）

「５世紀代の首長墓は丘陵から平地に下り、前方後円形の周濠をもつ天皇ノ杜古墳（86 m）から盾形周濠の今里車塚古墳（74m）、恵解山古墳（120 m）と続く。」　（『季刊考古学』10　P56 ）

⑦　－各文献の天皇の杜古墳引用箇所－